

生きた経験に基づく「生きたことば」に魂を揺さぶられた
—川上郁雄著『「移動する子ども」学』を読んで

「移動する子ども」という概念は、実態としての子どもをさすものではなく、「空間」「言語間」「言語教育カテゴリー間」の移動の体験を、意味ある経験として意味づけた記憶を指し、分析概念であると本書では述べられている。だからこそ個人のその時々の主観的意味づけによって語られる経験の記憶そのものも、動態性を帯びてくる。本書を読み進めるほどに、この概念の柔軟性が、100年前から重ねられてきた「移動」に関する思索、そして複数の学問領域、さらに「移動する子ども」をいかにダイナミックに繋いでいるかを感じさせられる。

また本書のなかで取り上げられている、自己エスノグラフィー、文学作品、インタビュー等を通じた「移動する子ども」の語りは、まさに生きた経験に基づく「生きたことば」であるといえよう。本書での語りを読んでいて、ウィトゲンシュタインが「ことばというものには魂がある」といったことを思い出した。本書の生きたことばの数々には魂を感じさせ、さらにそれは、第12章で書かれているマユミさんのような語った者の魂を癒すだけでなく、わたしのように語りを聴いた(読んだ)者たちの魂をゆさぶるものである。

「移動する子ども」学は、21世紀に生きる個々の人間をホリスティックかつ動的に捉える学問領域であるだけでなく、研究にかかわるあらゆる人間の魂に寄り添う実践でもあると考える。

寺村優里（早稲田大学大学院文学研究科修士課程）